

原著論文

日系カナダ人による地域への教育貢献の一考察 —「異文化理解」と「英語コミュニケーション」の視点から—

大石 文朗

A Study on Educational Contributions to the Local Area in View of Cross-cultural Understanding and Communication in English by Japanese-Canadians

OISHI Fumio

要 旨

カナダのブリティッシュ・コロンビア州ニューデンバー市に在る日系収容メモリアル・センター (The Nikkei Internment Memorial Centre) は、地域の小学生や中学生に対して、日系カナダ人の理解のために様々な教育的な提案をし、また、それらの研修を実施している。その際、教育的ツールとして、カナダに唯一残された戦時中の遺物のもとより、*A Path of Leaves: a guided study to the Nikkei Internment Memorial Centre*という教本を使用し、小学生や中学生に対して様々なアクティブ・ラーニングの機会をも提供している。

本稿では、これらの教育内容を「異文化理解」と「英語コミュニケーション」の視点から考察することによって、我が国の異文化理解教育と英語コミュニケーション教育に対しての一助を模索する。

キーワード

日系カナダ人 異文化理解教育 英語コミュニケーション教育 アクティブ・ラーニング

目 次

- I. はじめに
 1. 研究の背景
 2. 研究の目的
- II. 日系収容メモリアル・センターに展示された遺物等を通して
 1. 「異文化理解」の視点より
 2. 「英語コミュニケーション」の視点より
- III. *A Path of Leaves*を通して
 1. 「異文化理解」の視点より
 2. 「英語コミュニケーション」の視点より
- IV. おわりに

考察のまとめ

注

文献

I. はじめに

1. 研究の背景

カナダや米国に代表されるような移民で成り立った国は、「国家の統合」と「多様性の容認」という理念のはざまに葛藤してきた。国家の統合に関しては、Crevecoeur(1782)が『アメリカ農夫の手紙』において、多様な民族や文化が統合され新たな国家が誕生すると唱えた¹⁾。また、Turner(1893)は、『アメリカ史におけるフロンティアの意義』にて、フロンティアを通して多様な民族がアメリカ化されて統合されると主張した²⁾。さらに、Zangwill(1909)は、『メルティング・ポット』において、社会という坩堝の中で神の炎によって多様な民族が溶け合い新たな民族になると唱えた³⁾。しかし、これら統合を理想とする理念は、いつしか社会的主流派であるアングロ・サクソン民族が築き上げた社会への適応にすり替えられてしまった。その原因として遠藤(1999)は、Crevecoeurは移民をヨーロッパ人だけを想定して、自民族中心的な文明観であると指摘している⁴⁾。また、Turnerの「フロンティア学説」に対しても、多くの研究者が支配される先住民という弱者の視点が欠落していると批判している。さらに、木村(1997)は、メルティング・ポットの融合は、新たな民族を生み出すというより、むしろ、社会の主流派への融合に置き換えられてしまったと指摘している⁵⁾。

他方、「多様性の容認」は、第一次世界大戦時に北米で起きた、排他的な行き過ぎたナショナリズムに対する反省という教訓的なものが発端となっている。哲学者Kallen(1915)は、Cultural Pluralism(文化的多元主義)を提唱し、各々の民族集団に異なった存在価値があり、その価値が保証されることによって本当のデモクラシーが実現すると唱えた⁶⁾。また、村井(2004)によるとBourne(1916)は、コスモポリタンの文化の創造と異なる民族集団の共生を提唱したと述べている⁷⁾。しかし、Thernstrom(2004)によると、彼らの提唱はあまりにも理想主義的だったために当時の人種差別主義者にむしろ利用されて、皮肉にも移民制限という結果をもたらしたと指摘している⁸⁾。実際、Johnson(1998)は、米国では、1921年に「割り当て移民法」が設けられて、その定数システムによって各地からの移民が制約され、1927年にはアジア移民が事実上禁止されて、北西ヨーロッパ人に対して有利な移民制度になったことを指摘している⁹⁾。このような多様性の容認を否定する流れを変えたのは、第二次世界大戦後の世界の力の均衡の

変化であった。坂本(1992)は、第二次世界大戦後の国際社会の動きを、「平和」「開発」「人権」という概念が座標軸になったと指摘している。特に、1970年代以降に重んぜられた「人権」は、個人の人権ばかりではなく集団の権利である自決権をも含めた包括的な意味での人権が重視されるようになったと言及している¹⁰⁾。このことにより、KallenやBourneが唱えた文化的多元主義が再び脚光を浴び、1980年代以降、新たにMulticulturalism(多文化主義)が提唱された。カナダでは、1971年にTrudeau首相が「多文化主義」を公式な国家政策として採用し、1988年には「多文化主義法」が制定された¹¹⁾。

現在のカナダは法制化されたこともあり、「多文化主義」に基づいた異文化理解教育が重視されている。また、言語コミュニケーションに関しては、国家政策として採用された「二言語主義」のもと、英語とフランス語のバイリンガル教育が行われている。このような社会環境のカナダを対象にした、「異文化理解」と「英語コミュニケーション」に対する研究は、我が国の異文化理解教育と英語コミュニケーション教育へ多大なる示唆を与えるものだと思われる。

2. 研究の目的

カナダのプリティッシュ・コロンビア州ニューデンバー市に在る日系収容メモリアル・センター(The Nikkei Internment Memorial Centre、以降日本語表記とする)は1994年の7月に開館され、第二次世界大戦当時の日系カナダ人強制収容所の一部が当時のまま保存されており、多くの遺物も展示されているカナダで唯一の施設である。そして、中心的な施設運営者は、ニューデンバーの強制収容所の経験者でその地に関わってきた日系二世のカナダ人である^{註1)}。また、ニューデンバーの強制収容所は戦時中のみならず、第二次強制移動、いわゆるカナダ政府の日系人散在政策が行われた時にも、日系カナダ人の居住場所として重要な役割を果たした。この散在政策は、1945年に終戦を迎えたにもかかわらず、プリティッシュ・コロンビア州から日系カナダ人は追放を命じられ、1949年まで続いた政策である^{註2)}。しかし、唯一ニューデンバーの強制収容所だけは、重度の結核病患者とその家族、身寄りのない高齢者を受け入れるため、1957年まで収容施設を利用して住ませ、その数約1,200名に達した。故に、他の強制収容所^{註2)}の施設はすべて終戦を迎えるとともに取り壊されたが、ニューデンバーの施設だけがその後も使用されることとなった。1957年以降は、希望者数百名に対して小屋や敷

地が政府から与えられたが、これら一連の出来事が、奇跡的に当時の収容小屋を現存させた大きな要因となった^{注3}。

現在、限られたスタッフにもかかわらず、学校の社会見学を積極的に受け入れている。また、センターへの唯一の交通手段は自動車であるが、冬季は雪のため途中の道路が閉鎖されることもめずらしくないので、センターの開館期間は5月～9月と期間が限られている。この5カ月間の開館期間にもかかわらず、毎年約500名以上の生徒や学生が教員の引率のもと、社会見学として近隣はもとより米国からも来館している。これらの社会見学は授業の一環として行われているため、学校と連携して様々な教育的効果が考慮されて実施されている。故に、とりわけセンターはこの学校と連携した取り組みに現在力を入れており、日系人の歴史や思いを学校関係者がより理解するために協和会^{注4}が作成した *A Path of Leaves: a guided study to the Nikkei Internment Memorial Centre*^{注5}を教本として活用している。

本稿ではセンターにおける現在の取り組みとして、展示された遺物等と教本である *A Path of Leaves* を「異文化理解」と「英語コミュニケーション」の視点より考察することによって、我が国の異文化理解教育と英語コミュニケーション教育に対しての一助を模索することが目的である。

II. 日系収容メモリアル・センターに展示された遺物等を通して

1. 「異文化理解」の視点より

当時の遺物が主に展示されている会場は、協和会ホールと呼ばれているところである。戦時中は収容者の集会場、子ども達の学びの場、宗教的な集いのため等に使用されていたホールであった。このような遺物等の展示になると、かなりオーガナイズされていないと散漫的になり、来場者の印象に残りにくいということになりかねないであろう。そのためセンターでは、テーマごとに各ブースを設け、時代を追って日系カナダ人の歴史を追体験できるような構成になっている。

第1番目のブースは、「日系一世」についてである。これは、日系人にとって一世は自らの原点であるという思いであろう。当時の写真が多用され、視覚的に一世の方々が理解できるように工夫されている。そこに映し出された人びとは、日本の着物を着ており、顔の表情もどこか緊張気味で、まさに西洋人とは異質な人たちであったことが容易に読み取れる。このこと

は、日系カナダ人自ら、カナダにおいて原点である一世は「異質な存在」であった事を自覚しており、その異質性がその後の悲劇につながっていくことを訴えたものであることがうかがえる。

第2番目のブースは、「日系二世」についてである。そこには日系人の繁栄が強調されている。ある者は商売で、あるものは農業で、ある者は漁業で。商店の内部の写真ではいかに多種多様な商品を扱っていたのかが撮られている。さらに、作物の収穫、漁船の保有などの写真を通して、日系二世がカナダ社会に受け入れられていたことを訴えている内容である。また、日系二世は洋服を着こなし、笑顔で写真に写るなどして、カナダ社会への同化を印象づけている。それらは、多くの私財を保有したことによって、カナダ社会の一員としての自負すら感じさせるものである。

第3番目のブースは、「日本帝国軍の真珠湾攻撃」についてである。もっと感情的に悲劇を訴えることもできたように思われるが、むしろ、歴史的事実が淡々と展示されている。

第4番目のブースは、「日系カナダ人の強制移動」についてである。白人の連邦警察の警官が強制移動の告知書を掲示している写真の展示が特に印象的である。その告知書の文面も展示されており、その文書は「敵性外国人男性に告ぐ」で始まっている。筆者は、この第4番目のブースが一番重要で、日系カナダ人が後世に伝えたかった本質が込められていると受け止めている。その後のカナダ政府が日系人に対して行った偏見と差別に満ちた対応を、この白人警官の一枚の写真は「白人至上主義」に基づいた、異質排除を象徴したものであった事を訴えていると思われる。また、先の3つのブース内容と関連付けてみると、確かに異質な存在であった一世は苦勞の末、カナダ社会に根をおろす基盤を作った。そして、二世である子ども達は、カナダで生まれて英語を母語として育ち、それなりの繁栄を築き、自らはカナダ社会に同化していたと思っていた。しかし、それらすべてが崩壊する大事件は、「日本帝国軍の真珠湾攻撃」であることは歴史的な事実であるが、これは単にその後自らに降りかかる差別的な対応のきっかけにすぎず、むしろ、当時のカナダ社会に潜在的に存在した人種差別と、「異質な存在」を受け入れない不寛容さが悲劇の原因であったと読み取れよう。

第5番目のブースは、強制移動に伴う私財の没収についてである。特に印象的な展示は、河畔につながれた数多くの漁船の写真である。他に、家屋や自動車等のすべてが没収され、強制移動には手荷物

しか許されなかった。それら写真の脇にある説明文によると、強制移動に伴い私財を保護するための没収であると当初は説明されたが、その後、強制移動や強制収容に経費がかかったという理由で、勝手に政府により二束三文で売却されてしまったとある。このことにより戦後、日系人には帰る場所が無くなってしまった。

第6番目のブースは、本格的に強制移動される前に一時的に収容された仮収容施設の様子が展示されている。その場所は、もとは家畜用の品評会の会場であり、地面には糞尿が混じり、大変不衛生な場所に簡易ベッドを置いただけの所であった。この不衛生な仮収容施設的环境により、特に日系カナダ人には肺結核を患う率が高かったことが訴えられている。

第7番目のブースは、強制収容先が決まり、仮収容施設から移動する様子が展示されている。白人の警官が見守る中、手荷物が並べられ、混乱することなく日系人の方々が移動する様子が印象的である。

第8番目のブースは、強制収容された各地の地理的な特徴や当初の住まいが展示されている。特に印象的なのは、当初は住まいの個数が足りないため多くの人たちがテントで暮らしていた様子が説明され、実際どのようなテントが使用されていたのかを説明するために実物が展示されている。真冬になると雪の重みで貧弱なテントは潰れた状態になり、その中で生活を余儀なくされたことが説明されている。

第9番目のブースは、数年間にわたった強制収容所での生活の様子が展示されている。特に強調されているのが、子ども達への教育である。教師経験などがある二世の方々が三世に対して、公教育の補完的な役割をボランティアで行っていたことがうかがえる。当時実際に使用されていた机なども展示されている。しかし、あくまでも学習教材など制約された中での教育であったので、収容生活中の学習の遅れが後々三世の人たちに重くのしかかったことが説明されている。さらに、各行事で使用されたものが展示されている。それは、餅つきの道具、盆踊りの時に使用した提灯、千羽鶴、俳句、日本のレコードなどである。写真の展示の中には、剣道を行っているものもあり、当時の日系人は、一世の方々の影響が強く日本的な行事などを通して、人々を結びつけるきっかけとしていたことがうかがえる。

第10番目は、宗教についてである。これはまさに日本では見受けられない、ハイブリッドな様相を呈している。当時使用されていたものが展示されているが、中央に仏壇が置かれ、その前に賽銭箱があり、両脇

には教会でみられるオルガンが置かれている。いわば、仏教、神道、キリスト教の折衷的な作りになっている。しかし、これはあくまで宗教が融合したものではなく、集会所が1か所しかないため、それぞれの宗教が交代で使用するための合理的な作りであったことが説明されている。

第11番目のブースは、戦後カナダ政府が行った散在政策について展示されている。これは、日系人が一部の地域に固まって生活することを禁じたもので、ある意味、収容所生活よりも過酷さが強いといったよいであろう。収容所生活は、良くも悪くも同じ境遇の日系人という同朋が協力し合うことができたが、この散在政策によって日系人社会は分断され、差別と偏見に満ちた当時のカナダ社会で生きることを強いられた。また、子ども達にとって、収容所生活中の勉学の遅れという現実が重くのしかかっていった。

第12番目のブースは、「日系カナダ人の戦後補償運動」についてである。1977年の日系移民100年祭をきっかけに強まった運動であるが、戦時中の日系カナダ人に対する不当な扱いに対する補償と名誉回復を訴えたものであった。その結果として、1988年に、カナダ政府から謝罪文と補償金が渡されたことが説明されている。

センターの展示を通して一貫していることは、出自の日本文化を敬愛していることであろうと思われる。日系カナダ人がたどってきた過酷な歴史からすると、むしろ、自分達が築いたすべてを破滅に追いやるきっかけを作った「日本」(日本的なすべてのこと)を否定してもおかしくないのである。しかし、日系カナダ人は収容所時代はもとより、センター設立の1994年時にもセンター内に日本庭園を設けている。これは当時のカナダ社会において異質な存在であった一世を否定することは、自らの両親を否定することになるという思いからきているのだと思われる。つまり、カナダのような移民で成り立った国は、出自の文化を世代の違いはあるが、多かれ少なかれ背負っているものであり、それらを否定することは自らを否定することにつながるという思いではなからうか。戦後のカナダ政府の謝罪は、白人至上主義に基づくカナダ社会は幻想で誤りであり、画一的な価値観に基づく文化など存在しないとの宣言であった。異文化理解に必要な教育は、各々が自らを異質なものを多かれ少なかれ内包しているという認識を持ち、他者の異質な部分を敬愛し、受け入れる「寛容さの涵養」に他ならないことを、これらの展示は示唆しているよう。

2. 「英語コミュニケーション」の視点より

各ブースには英語による大見出しがつけられているが、そこに用いられた英語表現は発信者の思いが凝縮されたものである。そして、大見出しということで限られた字数により、発信者の意図を最大限伝える必要がある。ここではそれらの英語表現を検討することによって、来館者に何を訴えたいのかをコミュニケーションの視点より考察する。

第1番目のブースの大見出しは、"ISSEI: THE PIONEERS"である。一世という日本語の響きを大切にしたいという思いが伝わってくる。また、"THE FIRST GENERATIONS"ではなく、"THE PIONEERS"という表現を選択したのは、単に順序的な表現ではなく、困難な道を切り開いた「たくましい人びと」という一世に対する敬意の思いが込められているのであろう。

第2番目のブースの大見出しは、"NISEI: ESTABLISHING ROOTS"である。これは、一世同様、二世という日本語の響きで表記されている。また、"ESTABLISHING ROOTS"という表現に二世の方々の思いが込められていよう。これは「カナダ社会に根を下ろした」という意味で、二世はカナダ人なのだという主張が込められていよう。

第3番目のブースの大見出しは、"PEARL HARBOR"である。通常、「真珠湾攻撃」を意味する場合、"ATTACK ON PEARL HARBOR"と表記する。このようにATTACKをつけないことで受ける印象を和らげようとしているように思われる。

第4番目のブースの大見出しは、"THE UPROOTING"である。この表現は第2番目のブースの"ESTABLISHING ROOTS"という表現に関連付けたものであろう。一世と二世が苦労をして根付かせたものの「根を引き抜く」という衝撃的な印象の表現である。そこに自分たちが受けた理不尽さと、根が引き抜かれた草花は枯れていくしかないという残酷さを込めた表現であろう。

第5番目のブースの大見出しは、"CONFISCATION OF PROPERTY"である。「私財の没収」という端的で分かりやすい表現が使われている。また、私財といってもどこまでの範囲を示すのかを説明するのに、数多くの漁船や自動車、家屋の写真等の展示された写真が効果的に使われている。

第6番目のブースの大見出しは、"HASTINGS PARK"である。PARKという単語が使われているので、日系カナダ人の歴史に初めてふれる人たちは、遊園地のような場所を想像するかもしれない。このHASTINGS PARKは仮収容された場所の地名を

表している。仮収容施設という表現を使わず、PARKという単語が入ったこの地名を使ったのは、自分たちの扱いに対する皮肉の思いが込められているのではなかろうか。

第7番目のブースの大見出しは、"MOVED"である。この表現に込められた思いは、日々の生活の拠り所となる住居はなく、いつも追い立てられるように移動を強いられるとともに、精神面でも次へ進んでいくしかないという思いを一単語に込めたように受け取れる。

第8番目のブースの大見出しは、"THE WEST KOOTENAY VALLEY"と"INTERNMENT CAMPS"である。これはロッキー山脈麓の「西クートニーヴァレー」に「強制収容所」が多く存在したので、地図を使い分かりやすく正確に歴史的事実を伝えるために地名が使われている。

第9番目のブースの見出しは、"SURVIVAL"である。これは「生き延びる」という表現である。この「生き延びる」という表現に込めた思いは、単に強制収容所生活を生き延びるというだけではなく、いつか解放されて現実が待ち受けるカナダ社会に戻った時に、その中で生き延びるための準備も含まれている表現であろう。

第10番目のブースの見出しは、"BUDDHIST TEMPLE"である。ホールの様相は、神道、仏教、キリスト教という折衷的なものではあるが、やはり主たる宗教は仏教だったのであろう。「寺院」という表現が使用されている。

第11番目のブースの見出しは、"UPROOTED AGAIN"である。これは当時のカナダ政府の日系人に対する散在政策の事であるが、日系カナダ人の歴史的流れに対して"AGAIN"を用いることでたび重なる苦難という意味を持たせ、"ROOT"と"UPROOT"という簡潔な表現によって分かりやすさを強調したものであろう。

第12番目のブースの見出しは、"THE STRUGGLE FOR REDRESS"である。このREDRESSという語は「補償をする」という意味のみならず、「過去の誤りを正して均衡を取り戻す」ということをも意味する。日系カナダ人が消失した有形の財産の補償ばかりでなく、無形の日系人コミュニティや日系人としての自尊心などの回復をもそこには含まれていた。そのREDRESSを勝ち取るためにSTRUGGLE(もがき苦しむ)という表現である。

これら英語表現の特徴は、大見出しということもあるので各々のブースの展示内容を象徴するような端的な表現になっている。また、戦争被害者の立場から

展示内容や英語表現を選別するのに、当時のカナダ政府や日本帝国軍などに対して過激に攻撃する立ち位置も取れたが、意図的に避けられている。そして "SURVIVAL" や "STRUGGLE" に代表されるように、日系カナダ人の主体的な生き様を強調した表現が取られていると思われる。

Ⅲ. *A Path of Leaves* を通して

1. 「異文化理解」の視点より

A Path of Leaves は、26名の協和会メンバー、4名の Production Team、7名の Production Consultants、4名の Education Consultants という、総勢41名の人々によって作成され、総ページ数は121ページである。1999年の8月に出版され、現地の小学校や中学校の生徒に対しては、しばしば教本として使用されることもある。出版した主旨が「前置き」の箇所に下記英文のように記述されている。それを要約すると、5、6、もしくは7年生 (Grades 5, 6, or 7) を対象にして内容は書かれたものである。本書の目的は、カナダの歴史とナショナル・アイデンティティに関して生徒の学びを手助けすると同時に、教員が授業において日系カナダ人の経験を生徒により理解させ、それらを敬うことをそれとなく論じていくことを支援することと述べられている。

A Path of Leaves can also provide the opportunity for exploring national attitudes towards Canadian immigration, cultural diversity and communities of colour. Teachers can help students to examine the ways that Canada's cultural communities define themselves, as well as institutions, centres and events that support their distinction. To facilitate this learning, A Path of Leaves has been written for guided study in grades 5, 6, or 7 with the placement of information being centered on Canadian history and national identity. Bringing this knowledge, in depth, into a classroom implies respect for and understanding of the Japanese Canadian experiences. To assist teachers in this process, A Path of Leaves has been designed to support and facilitate visits to the Nikkei Internment Memorial Centre and to encourage the participation of Japanese Canadian senior and other knowledgeable members of each school district's local Japanese Canadian communities.¹³⁾

さらに、教育の一環として本書を使用する際の注意事項として、「繊細なテーマ内容」を扱っていることと、「答えのないテーマ」であることが強調されている。そして、そのような内容を扱う場合、ブリティッシュ・コロンビア州の Teacher's Federation Discussion Guide における、特に次の4点を遵守する重要性が言及されている。

1. A classroom is not a platform.
2. Controversy is best taught through discussion rather than instruction.
3. Discussion should protect divergence of views among participants.
4. A teacher has responsibility for ensuring exploration of the issue so the discussion promotes understanding and is not merely an exchange of intolerance.¹⁴⁾

つまり、日系カナダ人の強制収容に関わる繊細で答えのないテーマは、教員が教えるというよりも、むしろ生徒同士のディスカッションによって理解を深めていった方がよいということである。またその際、様々な意見が尊重されるとともに、単に不寛容さのやりとりには陥らないよう、教員が議論を深めていく責任を負っているということである。

過去の歴史的事実については、下記の Chapter 1 ~ Chapter 7 で構成されている。また、協和会メンバーの当時に回想した簡潔な文書が、各 Chapter の冒頭で紹介されている。

- Chapter 1 …… Immigration & Prosperity
- Chapter 2 …… First Uprooting and Confiscation
- Chapter 3 …… Internment and Survival
- Chapter 4 …… The San
- Chapter 5 …… The Second Uprooting
- Chapter 6 …… Redress
- Chapter 7 …… Peace on Earth

Chapter 1 では、戦時中に義理の兄が Road Camp (道路建設のための強制労働) を拒否したため、刑務所に入れられた時のことを回想した、協和会メンバーの Mrs. K. Okura が書いた文章から始まっている。それに続いて、1877年に日本人として初めてカナダへ移民した永野万蔵の紹介と、一世全般に関

する当時の生活の様子が述べられている¹⁵⁾。

Chapter 2では、戦争による強制移動でバンクーバーを離れる時に祖父母と自分だけが最後まで取り残された不安と孤独を綴った、協和会メンバーのMrs. Sumie Matsushitaの文章から始まっている。そして、日系カナダ人はカナダ連邦警察によって、真珠湾攻撃が行われる6ヶ月前にすでに指紋登録を強制させられ、開戦後である1942年にはWar Measures Act (戦時措置法) によって太平洋岸から100マイル以東へ強制退去させられたことが述べられている。その後日系カナダ人の身に降りかかった、財産没収、道路建設のための強制労働、Hastings Park (仮収容施設) への強制移動、強制収容所への移動などが記述されている¹⁶⁾。

Chapter 3では、冒頭に、センターの見学に来た生徒からよく受ける質問を、協和会メンバーのMr. Nobby Hayashiが紹介している。これらの質問に対して、当時14歳だった自分の目線で答えている。このChapterでは1942年から1945年までのニューデンバーの強制収容所に関して、協和会の結成、収容小屋の建設、子どもたちの教育、周辺住民との関わりなどが記述されている¹⁷⁾。

Chapter 4では、当時を振り返り、いかに自由であることが大切なことか、また、その自由はいかにあっけなく奪われてしまうものなのかについて、協和会メンバーのMrs. Pauli Inoseが冒頭で述べている。そして、The SanつまりThe New Denver Sanitarium (ニューデンバー療養所) とニューデンバー強制収容所との関わりについて、当時のHastings Park (仮収容施設) の不衛生な強制収容環境を振り返り、なぜ日系カナダ人に肺結核患者が増えたのかと言及されている。さらに、戦後も結核を患った日系カナダ人にとってニューデンバー療養所が果たした役割についても述べられている¹⁸⁾。

Chapter 5では、終戦時に日本へ帰国することを決め、多くの仲間と離ればなれになる当時の悲しみについて、協和会メンバーのMr. Shoichi Matsushitaが冒頭で述べている。このChapterは、Second Uprooting (第二次強制移動) つまり1945年春にニューデンバーの強制収容所を除くすべての収容施設は閉鎖され、それに伴い「ロッキー山脈以東へ移動するか」もしくは「日本へ帰国するか」の選択を日系カナダ人に対してカナダ政府が迫ったことについて言及されている¹⁹⁾。

Chapter 6では、政府の命令で強制収容所を変わるたびに、一からすべてをやり直さないといけな

かった理不尽さと、すべてを失った切なさについて、協和会メンバーのMrs. Kay Takaharaが冒頭で述べている。このChapterは、Redress (戦後補償と名誉回復) 運動について言及されており、戦後補償と謝罪が成立したのが戦後43年も経っていることが指摘されている。さらに、約22,000名が戦時中強制移動させられたが、謝罪と補償を受け取ったのは約12,000名のみであり、Redressの交渉が多難を極めたことが述べられている²⁰⁾。

Chapter 7では、協和会メンバーで同センター設立の中心的役割を担ったMrs. Chie Kamegayaの次のような俳句が冒頭で紹介されている。

"Across the sky the geese cry out, yet strive to keep formation."

これは、どんなにつらい状況にであろうと、みんなが手を取り合って協力し合うことの大切さを謳ったものであろう。このChapterでは、主に平和であることのありがたさや尊さが述べられている。具体的には、広島原子爆弾により急性白血病で12歳の若さで亡くなった佐々木貞子さん^{註6)}の例を引用して、戦争がいかに罪のない人々に犠牲を強いるのかが訴えられている²¹⁾。

これまでみてきたように、センターが歴史的事実を言及する場合、単に過去起きた表面的な出来事の羅列ではない。むしろ、公の出来事として明文化されていない、その時代に生きた人びとの「思い」を大切にしている。さらに、日本で生まれ育った親世代の一世とカナダで生まれ育った二世との間に生じた、文化的価値観に基づく差異にも言及している。

2. 「英語コミュニケーション」の視点より

Section 8 - Chapter Activitiesでは、言語(英語)活動用のアクティブ・ラーニングが設けられている²²⁾。例えばその中には、*How Do You See Me?*という活動がある。この活動の目的は生徒がstereotype, prejudice, racism, discriminationという語についてより深く理解し、それらに対して繊細な態度を養うことにある。生徒を2人ずつのペアにし、これら4つの語の意味を書かせる。そして、それらの単語に関わる個人的な経験を作文させ、それをペア同士で互いに検討し、その結果をクラスで発表させる。その後さらに、下記の質問に対してディスカッションを行う。

- ・How does it feel to be discriminated against?
- ・How does it feel to be the person doing the discriminating?
- ・Why would people want to discriminate against another person or group?

これらの質問に対して直感的に思ったことを一語もしくは数語で表現させる。例えば、*How does it feel to be discriminated against?*の質問に対しては、hurt, mad, angry, ashamed, embarrassed など、*How does it feel to be the person doing the discriminating?* では、powerful, important, ashamed, righteous など、*Why would people want to discriminate against another person or group?* に対しては、feel a victim, feel lack of control, fear などが例として挙げられよう。これらの率直な感情表現をまずは紙に一人一人書かせ、なぜそう思ったのか発表させ、その後生徒同士でディスカッションさせる。この活動を通して、自ら紙に書いた感情に対して客観的になぜそう思ったのかみつめることができ、自分自身や自分に与えている影響を再確認する機会となる。さらに、ディスカッションによって、ものの見方の多様性を学び、自分が自覚していなかった点を他者から気づかされる機会が与えられることになる。

他の *My Precious Things* という活動では、日系カナダ人の強制移動の一部を疑似体験することが目的となっている²³⁾。当時の日系人は、行き先も告げられず24時間の猶予だけが与えられて、子どもは一人重量75ポンドまで、大人は重量150ポンドまでの手荷物だけ持って行くことが許された。この活動では、生徒に対して重量75ポンドを超えない範囲で、自分なら何を持って行くかを決めさせることから始まる。具体的には、金曜日の授業でオリエンテーションを行い、週末に持って行くものを選び、実際に月曜日にそれらを学校に持って来るように告げておく。そして、月曜日の授業で、実際に持ってきたものを紹介させ、なぜそれらを選んだのか、自分にとってどのように大切なものなのかを自らの言葉で説明させる。この活動は、移動に際して自分が現在持っている多くのものをあきらめなければいけないことを学ぶであろう。ある生徒は、大切なものということ家族のアルバムなどをたくさん持ってくるかもしれない。また、ある者は誕生日などに家族や友人からもらったプレゼントを持って来るかもしれない。しかし、当時の日系人がそうで

あったように、現実には生きていくために極寒をしのごく防寒用品が必要になる。それら生き延びるための生活必需品を持ってしまうと手で持てる量には限界があるので、多くのこれまでの家族や友人との「絆の証」をあきらめなくてはいけないことになろう。この活動を通して、重量75ポンドがいかに重たいのか、しかし、いかに多くの大切なものをあきらめなくてはいけないのかを考えさせ、その感情を言葉で表現することによって、当時の日系人の思いを察する機会が与えられることになろう。

また、*In a Word* という活動では、強制収容に関わる用語を正確に理解させることが目的である²⁴⁾。生徒は下記用語に対して、まずは自ら調べて意味を明確にし、各々がどのように異なるのかを区別する。その後、第二次世界大戦下の日系カナダ人を表すのに一番適切だと思われる用語を各自が選び、なぜそのように思うのか生徒同士でディスカッションさせる。

- ・repatriation ・internment ・refugee
- ・incarceration ・prisoner of war ・uprooted
- ・evacuation ・displaced person ・exiled

またさらに、他国で行われた強制収容や国外追放などの事例を生徒に調べさせ、政治的、経済的、社会的、人種差別的、宗教的視点から、それらが本当に必要なことであったのかを生徒同士でディスカッションさせる。

さらに、*The Journey* という活動では、地図によって戦前に日系カナダ人が生活していたコミュニティの地名を特定して、地理的な特徴を知り、強制移動によりどの地名に移動して劇的に生活環境が変わったのかを学ぶことが目的である²⁵⁾。教員はブリティッシュ・コロンビア州の大きな地図を用意し、多くの日系人が戦前暮らしていた西海岸沿岸部の地名、成人男性が送られた強制労働の地名、さらに強制収容所が存在した地名などを生徒に示す。そして、生徒をチーム分けして、日系カナダ人が関わったそれらの地域について、気候、人口、産業などに関して戦前・戦中時の様子と現在の様子を比較調査させる。その後授業にて、各チームに各地域の特徴を発表させ、それらについて生徒同士でディスカッションさせる。

他にも *Cause for Suspicion* という活動があり、実施方法は下記のように指示されている²⁶⁾。自分が書いた手紙を、他の者が検閲し黒のフェルトペン

で勝手に所々を塗りつぶし、その手紙を書いた者が返却された時にどう思うのかという内容のものである。

1. Divide students into pairs, for the purpose of exchanging letters.
2. Students write a letter (which they know will be shared in class) to a friend in another town. Students can write about their lives, what is happening in their neighborhood and school, their feelings about a recent uncomfortable event or experience.
3. Teacher collects the letters and redistributes the letters to the selected pairs, assuring that all students receive the other's letter.
4. The students are now the censors. With dark felt pens they black out "any suspicious words or phrases" in the letter.
5. Letters are then returned to their authors.
6. Each student reads portions of his or her letter to the class, indicating what was censored (if they can remember).

さらに、*Glossary*²⁷⁾では、重要な用語が簡潔な意味とともに36語(句)記載されている^{註7}。例を挙げるとBetray、Human Rights、Injustice、Prejudice、Racial Discrimination、Racismなど、特に日系カナダ人の歴史を語る上で必要不可欠であり、彼等の様々な思いが投影された言葉が選ばれている。その36語(句)の内8つが次の日本語である。その8つの日本語が選ばれたということは、その言葉に込められた日本的な精神、さらに生活様式を大切にしてきた証であると捉えることができよう。

1. Butsudan: Buddhist altar or shrine
2. Fujinkai: New Denver Japanese Canadian Ladies Association
3. Gambari: Name given to Japanese Canadian political activists
4. Kai: Japanese word meaning "association"
5. Kanji: The Japanese system of writing using modified Chinese characters
6. Nikkei: Person of Japanese heritage whose ancestors emigrated from Japan to settle in another country

7. Ofuro: Japanese bathhouse
8. Tofu-ya: Tofu factory

これらの言葉の多くは、他者との繋がりや絆を大切にすることを示したものではなかろうか。Butsudan (仏壇)は先祖との絆を、Fujinkai (婦人会)、Gambari (頑張り…日系カナダ人の政治活動家)、Kai (会)、Kanji (漢字)、Nikkei (日系)は、まさしく日系カナダ人同士の繋がりや絆を象徴したものであると思われる。

これらアクティブ・ラーニングや*Glossary*に共通していることは、「言葉に対しての繊細さを養う」ことであろう。特に、否定的かつ攻撃的な意味を持つ言葉については、言われた相手の身になって考えることの重要性が説かれている。さらに、言葉とは意思疎通の道具だけではなく、場合によっては人びとのつながりを象徴し、各々の社会的な立ち位置まで決めかねない力を持つものであるという思いであろう。これは、一世と二世が「日系人」という言葉でひとくりにされて、「敵性外国人」という言葉で社会から排除されたという、自らの苦い経験からきているものだと思う。

IV. おわりに

考察のまとめ

1. 「異文化理解」の視点より

展示された遺物等とセンター発行の*A Path of Leaves*を検討した結果、我が国の異文化理解教育への一助として次の4点が挙げられると思われる。

- ① 自己肯定感の重要性
- ② すべての人が異質なものを内包しているという認識
- ③ 民族や文化に対する優劣主義的な価値観の否定
- ④ 多様性に対する寛容さの涵養

①の「自己肯定感の重要性」については、日系カナダ人は出自の日本文化を敬愛しており、一世に対してもパイオニアだったと認識し敬意を払っている。これは自らのルーツを敬うことによる「自己肯定感」が異文化を受け入れる際に大変重要な要因になるということだと思われる。自らを肯定できない者が、他者を肯定できないということであろう。

②の「すべての人が異質なものを内包している」と

いう認識」については、文化をより大きな観点で捉えれば様々な文化が存在する。例えば、若者文化やシニア世代文化に代表されるように、世代間の文化もその一つであろう。そのような年齢別グループに基づく文化だけではなく、各地域における社会性の違いに基づく文化もあろう。つまり、集団が存在する数だけ固有の文化が形成され、誰しもが異なる文化に属しているという認識があればこそ、それぞれの文化に各々の存在価値があることに気付くことになる。

③の「民族や文化に対する優劣主義的な価値観の否定」については、日系カナダ人が生き証人として国家による不正義と差別的な処遇を後世に残し、二度と同じことが起きないようにすることがセンター設立の原動力となったのである。このことから、民族や文化に優劣をつけたことがいかに悲惨な結果をもたらすのかという歴史的教訓からきていよう。

④の「多様性に対する寛容さの涵養」については、異なる文化背景を持つ人々が交流するグローバル化が進む我が国にとって、益々重要になる課題であろう。多様性はプラスの側面のみをもたらすだけではなく、マイナスの側面をももたらすものである。例えば、中国人旅行者による商品を大量購入するいわゆる爆買いは、経済的な恩恵をもたらすが、その反面、マナー違反などのトラブルをももたらしている。また、多様な民族の入国は、昨今ではテロの脅威と結び付けられ警戒されている。このように多様性が進めば進むほど、マイナスの面も肥大化するため、多様性の受け入れには、「寛容さ」という人としての本質が問われることになる。

2. 「英語コミュニケーション」の視点より

展示された遺物等とセンター発行の*A Path of Leaves*を検討した結果、我が国の英語コミュニケーション教育への一助として次の4点が挙げられると思われる。

- i. 主語は『I』
- ii. 言葉に対しての繊細さを養う
- iii. アクティブ・ラーニングの重要性
- iv. 『気づき』の重要性

i. の「主語は『I』」については、「私は～」というコミュニケーションの立ち位置のことで、自らの意見を発信できるという意味である。そのためには、「自らの考えを持つこと」や「自らの意識を高める

こと」が大切で、様々な知識を得たり経験を積むことがそれらを可能にすることが指摘されている。

ii. の「言葉に対しての繊細さを養う」については、言葉は単にコミュニケーションの道具だけではなく、場合によっては人とのつながりをも支配してしまうものであるという認識からきていよう。これは、「日系人」や「敵性外国人」という言葉によって個々の社会的なつながりが単純化され、さらにイメージ付けられて、強制収容所送りも合法化されたという苦い経験からきていよう。故に相手の立場になって言葉を慎重に選択する必要性が強調されている。

iii. の「アクティブ・ラーニングの重要性」については、活動や疑似体験を通して、直感的に浮かび上がる感情に直結した言葉を、グループでのディスカッション等を通して客観的に見つめることに主眼が置かれている。特に、アクティブ・ラーニングでは、ディスカッションが重視されている。これは、ディスカッションという話し合いの中で、各々の生徒が物事の見方の多様性を学ぶ機会を得るとともに、自分では思いつかなかった新たな発想や刺激をも期待することができるのが理由であろう。

iv. の「『気づき』の重要性」については、教員が何かを教えるという生徒にとって受け身的な学びで、差別を本当に理解できるものではないという捉え方である。生徒同士のディスカッションや様々な活動を経て、自分で考え、自分で気づくことが、本当に理解することなのだということが言及されている。

注

- 注1 戦時中の1943年に結成された協和会(日系人会)のメンバーが中心になってセンターは運営されている。カナダにおいて結成された日系人会が、同じ場所で継続して活動を行っているケースは他に類がないであろう。1945年の散在政策や時の経過と共に、収容時の小規模な日系人会はほとんど活動がなされていないか、自然消滅してしまっている。
- 注2 他の強制収容所として、Greenwood (1,777名)、Slocan Valley (4,814名)、Sandon (933名)、Kaslo (964名)、Tashme (2,636名) 等がある。
- 注3 戦後、1,277名の389家族に対して、ニューデンバー収容施設の使用許可がおりた。彼らは、結核病患者、他の重い病気にかかった患者、患者の家族、療養所のスタッフ、身寄りのない高齢者であった。
- 注4 プリティッシュ・コロンビア州安保委員会(British Columbia Security Commission)と交渉する目的と、互いに生活を助け合う互助会的な目的の組織として、1943年にニューデンバーの被抑留日系人によって創設された。
- 注5 *A Path of Leaves*は121ページからなり、1999年の8月に出版された。内容は、Preface, Introduction, Using A Path of Leaves, Contextual History, Chapter 1 - Immigration and Prosperity, Chapter 2 - First Uprooting and Confiscation, Chapter 3 - Internment and Survival, Chapter 4 - The San, Chapter 5 - The Second Uprooting, Chapter 6 - Redress, Chapter 7 - Peace on Earth, Section 8 - Chapter Activities, Section 9 - Openings, Section 10 - Resources and References, Timeline, Maps, Recommended Reading, Glossary, References, Acknowledgementsで構成されている。
- 注6 小学6年生時の被爆により急性白血病を発症し、鶴を千羽折ると病気が治ると言い伝えを信じて闘病中鶴を折り続けるが、644羽折り終えたところで息絶えてしまった。後に地元の中学生在が中心になって、彼女の像が「原爆の子の像」として広島市の平和公園に建てられた。
- 注7 記載されている重要な語(句)は次のようである。Betray, Butsudan, British Columbia Securities Commission, Confiscate, Controversy, Culture, Deport, Displaced person, Evacuation, Exile, Franchise, Fujinkai, Gambari, Heritage, Human Rights, Immigrate, Incarceration, Infrastructure, Injustice, Internment, Intermarriage, Kai, Kanji, Nikkei, Ofuro, Prejudice, Race Relations, Racial Discrimination, Racism, Redress, Relocation, Repatriation, Standpipe, Stereotype, Tofu-ya, Visible Minority.

文献

- 1) Crevecoeur, J.H.S.J.D., *The Letters from an American Farmer*, (1782).
秋山健他訳、『クレヴクール』研究社,(1982)を参照。
- 2) Turner, F. J., *The Significance of the Frontier in American History*,

American Historical Association, (1893).

- 3) Zangwill, I., *The Melting-pot*, Macmillan, (1909).
- 4) 遠藤泰生, 油井, 遠藤編, 『多文化主義のアメリカ』東京大学出版会, p.27 (1999).
- 5) 木村和男, 西川他編, 『多文化主義・多言語主義の現在』人文書院, p.66 (1997).
- 6) Kallen, H. M., *Democracy Versus the Melting-Pot, in Culture and Democracy*, The Nation, pp.190-194 (1915).
- 7) Bourne, R., *Trans-National America*, Atlantic Monthly, cxviii, pp. 86-97 (1916).
村井忠政, 「メルティングポットの誕生—メルティングポット論の系譜(1)—」『人間文化研究』名古屋市立大学大学院人間文化研究科紀要 Vol. 1, pp.17-30 (2004)を参照。
- 8) Thernstrom, S. "Rediscovering the Melting Pot - Still Going Strong", *REINVENTING THE MELTING POT* edited by T. Jacoby, Basic Books, pp. 48-49 (2004).
- 9) Johnson, P., *A History of the American People*, Harper Collins, (1998).
別宮貞徳訳, 『アメリカ人の歴史』共同通信社, (2002)を参照。
- 10) 坂本義和, 『地球時代の国際政治』岩波書店, pp.241-243 (1992).
- 11) 田村知子, 日本カナダ学会編『資料が語るカナダ』有斐閣, p.257 (2000).
- 12) 飯野正子, 『日系カナダ人の歴史』東京大学出版会, (1997).
- 13) *A Path of Leaves: a guided study to the Nikkei Internment Memorial Centre*, Kyowakai Society, New Denver, B.C., pp. 7-8 (1999).
- 14) 同上, p.11.
- 15) 同上, pp.17-21.
- 16) 同上, pp.23-29.
- 17) 同上, pp.31-36.
- 18) 同上, pp.37-40.
- 19) 同上, pp.41-48.
- 20) 同上, pp.49-52.
- 21) 同上, pp.53-55.
- 22) 同上, pp.61-62.
- 23) 同上, pp.63-64.
- 24) 同上, p.65.
- 25) 同上, pp.67-68.
- 26) 同上, pp.71-72.
- 27) 同上, pp.111-113.